Lesson 25　Theory 6 - The Most Familiar Modes

Lesson 25　理論 6 – よく使うモード

全ての 7th コードはⅤコードになり得る。（訳者注：この考え方はマスト！）
例えば、Ⅰコードの C、Ⅱコードの Dm、Ⅲコードの Em、Ⅳコードの F…。
どうして 7th コードがⅤコードになるのかを説明しよう。
前にも言ったことがあるけど、「7th」というのは 7 度をフラットさせる（半音下げる）ということ。

-playing(0:43)-　（1、2、3、4、5、6、7…7 度はフラット…1、2、3、4、5、6、7、8）

一般的に「7th コード」というのは 7 度をフラットさせたコードのこと。
だから「G7」という表記を見たらそれは G の 7th コード、つまり♭7 が追加されたコードのこと。
同じ“7”でも「△7」（メジャーセブン）とは混同しないでね。それはただのメジャースケール、つまりイオニアンモードだからね。
（訳者注：確かに、慣習的に「7th コード」という呼び方は♭7 が追加されたコードに対してのものだ）

(1:13)
ということで、（Key in C として）Ⅴコード（G7)、つまりミクソリディアンモードだ。(1:22)
（訳者注：ここまでの話と、ここからの話に関連性は全くない…つまる、ここからは新しい話題が始まるという意識で読み始めて欲しい…どうした、Robben?笑）
C メジャースケール上のダイアトニックコードは、C メジャースケール上のどの音がキーになっても同じく使える。
キーが Dm の時でも、Em の時でも、F、G、Am、Bm、C…と、どのキーの時でも同じものが使える。
例えは…

-playing(1:51)-

これは Key in C の時のⅥコード（Am）だね。1，2，3，4，5，6…。
ということは、Key in Am の時でも、Key in C で使えるコード（つまり C メジャースケール上のダイアトニックコード全て）が使えるということ。
だから（Key in Am として）…

-playing(2:17)-　（G…Dm…Em…）（訳者注：←A ペダルにして弾いてみてください。美しい！）

ちゃんとした一つの音楽になっているね。
ピアノの鍵盤（白鍵）をイメージすると分かりやすい。
（ピアノを弾く感じで）左手で（C メジャースケールから）一つの音をルートとして任意に選んで、右手で（C メジャースケール上のダイアトニックコードから任意に選んで）コードを弾く。
Ⅰコード、Ⅱコード、Ⅲコード、Ⅳコード、Ⅴコード、Ⅵコード、Ⅶコードの 7 つからどれでも。
つまり、7 つのルートに対して、それぞれ 7 つのダイアトニックコードがあるということ。
そしてどの音をルートに選んだかでモードが決まるんだ。

いずれにせよ、使うコードもスケールも（始まり方が違うだけで）全く同じ。
このように、一つのスケールからでも色々なことが出来るんだね。

(3:20)
じゃあ…Key in Am を使って…
独特のサウンドだね。
これはエオリアンモードだ。
でも全て（C メジャースケール上で作られるダイアトニックコードと）同じだ。

(3:50)
これは弾こうと思ったどのモードにも当てはまる話だね。
一般的にミクソリディアンモードとドリアンモードの２つは耳馴染みがある。
でも、フリジアンモードなんかはあまり使わないかもね。(4:16)
もし使おうと思っても、(フリジアンモードを作るため 6 弦開放 E を鳴らしながら）コードが…Am、G、F、Em、Dm…あまり合わないね。
（訳者注：ここで Robben が言わんとしていることは、C メジャースケール上で作られるダイアトニックコードは、C メジャースケールにおけるどのモードにおいても使用可能。だが、実際に“しっくり”くるのは、イオニアンモードはもちろん、ミクソリディアンモードとドリアンモードであり、フリジアンモードについては理論上は可能だが、あまりしっくりこない…ということだと思われる。）

(4:57)
ドリアンモードはどうかな…
マイナーKey の曲に合うだろうね。

(5:16)
今度はこんな感じの 7th コード（ここでは G7）はどうだろう。
ここではミクソリディアンモードだね。(5:31)耳馴染みのあるサウンドだね。
そして D ドリアンスケールも。
そしてもちろん、C メジャースケール（イオニアンスケール)、ドレミファソラシド…だね。
Doe, a deer, a female deer…
Ray, a drop of golden sun…etc…

【注記】
・押弦するポイントについて Robben は様々な言い方をしていますが、ここでは「5 弦 3 フレット C」「6 弦開放 E」などの表記に統一します。
・翻訳モノにありがちな読み難さの一因となっている「直訳」を排除した結果、Robben の実際の言葉とは若干違った表現になっている個所がありますが、読者にとってのストレスのない自然な理解を促すためのものであり、Robben が言わんとしていることはそのままに、大局を損なうことのない翻訳を心がけました。
・モードの解説において「〇〇スケール」と「〇〇モード」の言葉の使い分けはせず、Robben の言に最大限忠実に訳しながらも、より理解をしやすいように、柔軟にそれぞれを言い換えて訳しているケースもあります。

翻訳　山岸敦